

爆焰倉庫

爆焰特攻ドワーフ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

作者が燃え尽きてしまった短編を放置していく場所。

現在、設定を作り直している作品の旧・バージョンはここに運ばれます。

もしかすると再燃するかも。

## 目次

旧タイトル 世界樹と不思議なダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？

ダンまちをベースに世界樹の迷宮をぶち込み、ドラクエを注いだ結果

——— 1

旧タイトル セイレン島 冒険記

イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主がぶち込まれた

作品1 ————— 3

イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主がぶち込まれた

作品2 ————— 6

イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主がぶち込まれた

作品3 ————— 10

イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主がぶち込まれた

作品4 ————— 12

イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主がぶち込まれた

作品5 ————— 15

イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主がぶち込まれた

作品6 ————— 18

旧タイトル テロリストの首魁であるセンパイを助けろと頼まれた件について。

閃の軌跡×GOD EATER 1 ————— 22

閃の軌跡×GOD EATER 2 ————— 25

閃の軌跡×GOD EATER 3 ————— 27

閃の軌跡×GOD EATER 4 ————— 31

閃の軌跡×GOD EATER 5 ————— 35

閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD	閃の軌跡×GOD
EATER	EATER	EATER	EATER	EATER	EATER	EATER	EATER	EATER	EATER	EATER
16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
72	69	67	64	59	57	54	50	48	45	39

旧タイトル 世界樹と不思議なダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？

ダンまちをベースに世界樹の迷宮をぶち込み、ドラクエを注いだ結果

それは突然の出来事だった。

迷宮都市オラリオは一夜にして様変わりしてしまった。

突如としてバベル地下に広がっていた迷宮の入り口が塞がり、迷宮内にいた人々が吐き出されるように入り口から放り出された。

彼らが見ている前でダンジョンの入り口が閉じた。

魔法を撃てども、ダンジョンがあった場所は開くことはなかった。

彼らが怒りや戸惑いによって混乱しているとこんどは地面の奥底から突き上げるような振動が一回、二回、三回・・・どんどんと振動の間隔は狭くなっていき、ぴたりと止まった。

ドオンツ  
!!!!

その衝撃によってオラリオの外壁や建物の脆い部分がボロボロと音を立てながら落ちてくる。

ある教会にいた神様には大きな破片が落ちてきたが・・・問題はなさそうである。

オラリオに影が差す。

まだオラリオは夜だ。

彼らはみな空を見上げ・・・絶句した。

オラリオの外壁の向こう側に頂を見ることがさえ難しい樹のようなものが聳え立っていたからである。

その樹は下の方に遺跡が広がっており、その上には草木が生い茂る幹、その上には本来ありえない大地が形成されていた。

それよりも上は確認できなかった。

後日千里眼などのスキル持ちが全貌を露わにしようと神々の助力

の元観測を行ったが、何もわからなかった。

おそらく何らかの魔法が掛かっているのか大地より上は靄がかかったかのように視認できなくなったらしい。

次の日から探索メンバーが組まれた。

大手のファミリアをいくつか含む総勢150人にも上る探索団。

しかし、彼らを待っていたのは驚きの連続だった。

遺跡に踏み込むとメンバーがバラバラになったのだ。

同じ場所から入ったはずなのに自分を含めて数人しかいない。

慌てて入り口から出ると、同じように慌てて出てきた他のメンバーと無事に合流することが出来た。

このあと何回かの調査の結果、ここへは同時に5人までしか入ることができず、それ以上のメンバーで踏み込むとメンバーがバラバラになってしまうようであった。

また、モンスターにも出くわしたが多種多様の一言であった。

ダンジョン最上層に出現したゴブリンがいたのには驚きはなかったが、見たこともない水滴のようなプルプルとしたモンスターや黄色のトゲを持つハリネズミ、紫の毛を持つ四足歩行のネズミなどダンジョン内では見なかったようなモンスターも多数出現した。

何よりも探索隊が驚いたのはこの迷宮では冒険者としての実力が一切意味を持たないことだった。

魔法を唱えても発動しない、身体の無茶な動きに筋肉が耐えられない、装備が重すぎて持てなくなるなど探索隊の幾人かは重大な隙をさらしモンスターに袋叩きにされたりしていた。

こうしてオラリオから迷宮が消え、一年。

広大な迷宮は、入るたびに内部構造が変わることから「不思議なダンジョン」と呼ばれ、不思議なダンジョンの先に聳え立つ樹は「世界樹」と呼ばれるようになった。

いまだに冒険者たちは世界樹にたどり着くことは出来ていなかった。

旧タイトル セイレン島 冒険記

イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主が  
ぶち込まれた作品1

転生した。

神様はファンタジー世界って言ってたんだからチートももらった  
し勝ち組だと思っただよ………

で、ここ何処よ？

周りを見渡す限りの海と後ろには巨大な山脈。

そして周りには獣は居るけれども人は一人つ子居ねえ………  
確かに神様は何処に送るかは言っただけで無かったけどこれは酷すぎる  
だろおおおおお!!?

俺が起きたときに俺が持っていたのは

リュック（四次元ポケットみたいでなんでも入る）

火打石っぽいもの

ナイフ

ロープ

ノートとペン

そして……杖。

なんで杖が入っているかって？

チートで魔法が使えるようにしてもらったから媒介としての杖な  
んだろうが……

どう見てもドラクエの初期装備の【魔道師の杖】です。

使えねえどころか攻撃喰らったら一撃でへし折れるんじゃないかねの  
これ……

え？

遠距離から攻撃するために魔法があるじゃないかって？

最高位呪文とかで殲滅すればいいって？

俺、低コスト低リスクでバンバン打てる最下位呪文を選んだんだ  
よ。

「最高位呪文じゃと一発撃ったら気絶する」って神様が言うから、応用が利きそうな最下位呪文を選んだんだよ・・・

最下位呪文で無双するって面白味がありそうだし、まさか無人島っぽいところに送られるとは思っていなかったからな。

貰った特典は

- ・ドラクエの最下級呪文全部
  - ・MP急速回復（1秒間に3回復）
  - ・服飾作製技能
  - ・鍛冶技能
  - ・ステータス可視化
- の五つだ。

服飾作製技能でそこらにあつた流木から服が出来たんだが・・・物理法則とか質量保存の法則がおかしいよな？

で、現在の俺のステータスは

名前：レン

性別：男

レベル：1

HP：12

MP：37

ちから：3

みのまもり：3

かしこさ：8

すばやさ：6

攻撃力：10

防御力：7

魅力：6

装備：

頭：なし

上半身：布の服

下半身：布のズボン

右手：なし



左手：魔道師の杖

脚：木のサンダル

って感じに出ている。

ちなみに俺の最下級呪文は全ての魔法。

つまり、ドラクエシリーズすべてに出てきたやつが使える。

ドラクエⅠ～Ⅹまでの呪文とモンスターズシリーズの呪文。

ダイの大冒険に出てきた呪文も使える。

また、通常モンスターしか使わない呪文も使えるので結構万能である。

まあ器用貧乏でもあるのだが。

もしこの島にドラクエのギガントスとかいても攻撃手段がメラとかになるし。

呪文の能力はモンスターズ準拠になってるらしくベタンは相手の体力の何割かを削り取るみたいだけど（実際に近くにあった岩に使ったら、4分の1ぐらいが消滅した。）

さて、これからどうなるのかね・・・当分はここを拠点に頑張るしかないんだよね。

誰かがここに流れ着いてくれればその人と脱出手段を探ることが出来るだろうけどさすがに一人じゃ無理だしな。

ま、今日はベタンで削り取った岩の上で寝るとするか……………

zzzz

## イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主が ぶち込まれた作品2

よう。

神様のおかげでよくわからんうちに無人島に飛ばされたレンだ。

今日は食糧を得るために自分がいる砂浜付近を探索してみようと思おう。

昨日気が付いてから何にも食べてないからそろそろなんか食わないと死ぬ……

見た感じこの島には森があるみたいだし果物ぐらい実ってるはず。まあなかったら経験はないが獣とかとっ捕まえて喰うしかないけど。

とりあえず、杖で獣と戦うと危険だから……

呪文でそこら辺の岩ぶっ壊して鍛冶技能で使えそうな武器に加工するか……

で、呪文って唱えりやいいのか？

そうだとしたら、ぶっ壊せそうなイオを唱えてみるかな……

「イオー！」

と俺が呪文の名前を言うと俺の目の前に光の球が集まっ……つてヤベェ!?

俺がその場から咄嗟に転がって逃げると次の瞬間

ドツパアアアン！

さっきまで俺がいた砂浜が半径3メートル深さ30センチぐらい抉れた。

「おわあっ!?!」

あつぶねえ!?!あのままだら俺ひき肉になってたぜ……

イオは危なそうなんで、メラ行ってみるか……

「メラー！」

俺がそう唱えると下ろしていた手から火球が出て砂浜に着弾した。

「……もしかして呪文は手から出るのか?」

ってことは相手に手や媒介の杖を向けないといけないうってことか？

「メラー！」

そう思った俺は今度は手を空に向けてメラを唱えた。

すると、手から出た直径30センチほどの火球が空に向かって飛んでいき、5メートルぐらい飛んだところで弾けて消えた。

「おっ、ちゃんと飛んだな」

と俺が感心していると・・・

——【チュートリアル：魔法の心得】を完了しました。レンは10の経験値を得た！

という声が俺の頭に響き、それと同時にいつものドラクエのレベルアップ音が流れた。

——レンのレベルが2に上がった！

HPが3上がった

MPが5上がった

ちからが1上がった

みのまもりが2上がった

かしこさが4上がった

スキル：【魔法制御：距離】を習得しました。

「・・・今のチュートリアルだったのか？」

俺は脳内に響いた音声を聞きながら、習得したというスキルについてみてみた。

【魔法制御：距離】

魔法制御系スキルの一つ。

魔法を唱えたときにその魔法が効果を及ぼす範囲、魔法の飛距離を変更できるスキル。

飛距離、範囲は最低1メートル最大10メートルまで変更可能。

1メートルにつき消費MPが1増える。

ということが書いてあった。

「もしかして、イオとかも効果範囲を間違えたから至近距離で発動したのか？」

と俺が疑問に思い、ステータスを眺めていると昨日見たときは無かった【魔法】という項目が増えていた。

「なんだこれ？」

俺がその項目を不思議に思っていると自動的に【魔法】の項目が開いた。

### 【魔法】

・メラ

飛距離：5メートル

効果範囲：半径1メートル

属性：炎

消費MP：2

・イオ

飛距離：1メートル

効果範囲：半径3メートル

属性：爆発

消費MP：5

・ベタン

飛距離：3メートル

効果範囲：術者指定の一体

属性：重力

消費MP：12

・バギ

飛距離：5メートル

効果範囲：半径1メートル

属性：風

消費MP：4

現在上記以外の呪文はレベルが達していないため使用できません。

.....あれ？

回復呪文が使えねエ

流石に最初から全部使えたらチートだろうから神様が制限したん

だろうが・・・

それでも回復呪文が使えないってどうすりゃいいんだ？

果物とか食べれば回復するのかな・・・

と考えていると・・・

ウオンウオン！

「ファッ!？」

ちよ、なんかオオカミっぽい獣が来たんですけど!?

ここどう考えても南の島だろ!?

何で寒冷地域に居そうなオオカミが居るんだよおおお!?

イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主がぶち込まれた作品3

オオカミが襲いかかってくる。

俺も現実ではテレビの番組でしか見たことはなかったのだが、オオカミの主な生息地は寒冷地域だった気がする。

「うおっ!」

と考えた一瞬の間についてオオカミに腕を引つかかれてしま・・・  
「いつてええええええ!」

腕に爪が刺さって血が出てくるガラスで抉られたかのようにズキズキとした痛みが走る。

俺はリアルすぎる痛みで腕を抱えて倒れ込んでしまう。

体勢を崩した俺をオオカミは前足で抑え込み俺の頭に顔を向ける。  
むわっとした生温かくそれでいて生臭い息が鼻に入る。

「くっ、メラー!」

俺は吐きたい気持ちを抑えなんとかメラを左手から放つ!  
キヤイン!

胸に火球があたりオオカミは仰け反った。

「う、うおおおおおおお!」

俺はオオカミを大声を上げながら左腕で突き飛ばす。

俺の右腕からはまだ血が流れ痛みは続いているがそんなことを気にしていたら俺が喰われる!

突き飛ばされたオオカミは俺の方向を睨み付けつつ俺に攻撃する隙を狙っている。

攻撃される前に殺す!

「バギイ!!!」

オオカミに向けて翳した左手から無色透明だが太陽の光でかろうじてわかる刃が三つ飛び出し、オオカミの身体を切り刻みオオカミは断末魔の叫びを上げながら倒れ伏した・・・とオオカミの身体が光り出しその場に何かを残して消え去った。

「いてててて・・・」

俺が痛みに耐えていると、だんだんと傷が塞がりだした。

「？俺は今回復魔法とか使っていないはずだし、そんなスキルは無かつたはずだが・・・？」

と俺が不思議に思つてステータスを見ると、こんな表示があつた。

【フィールド効果：セイレン島の恵み】

戦闘を行っていないとき、だんだんと体力が回復する。

ただし、建物内・洞窟内は効果が発動しない。

フィールド効果か・・・セイレン島の恵み・・・ん？セイレン島？

セイレン島つて確か、イースⅧの舞台じゃ・・・

「つてことはアドルが見つけてくれれば俺は助かるのか・・・？」

俺はこのことに喜んだが・・・

「でも、アドルがここに流れ着くのつていつだっけ？というか、いまはいつの時代なんだ？ダーナとかの時代だと俺詰むぞ・・・」

もしここがイースⅧのセイレン島だとしてもアドルたちが来るのがいつか分からない限りは樂觀視できない。

ダーナの時代だと隕石衝突の余波で俺が死にかねんし、アドルたちが諸々の出来事が終わつて出港した後だと俺絶対にこの島からでられねえ・・・

「もしかして、俺詰んでる・・・？」

お先真つ暗だな・・・俺の転生ライフよお・・・

初戦闘の後の疲労感と空腹と最悪の未来を想像してめまいがしてきたぜ・・・







濃霧になっている木々の奥から顔を出したのはティラノサウルス  
のような巨大な頭を持ち、漆黒の体躯の巨大竜・・・ストーリー序盤  
では勝てない古代種が俺の前に現れた。

o h , m y g o d

イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主が  
ぶち込まれた作品5

「げっ」

そう呟いた俺は悪くない。

目の前には古代種のギガン・タイランがいる。

相手はフィールドに出現する古代種のなかではかなり強い部類に  
入る。

しかも、古代種は特徴として通常の武器では止めを刺せないし倒し  
ても即復活するという鬼畜な性能がある。

……よし、逃げよう。

「ダアアアアアッシュ!!!」

俺がすぐさま後ろを向いて近くの高台に向かって逃げようとする  
と、ギガン・タイランは息を吸い込み……吐き出した。

G O G A A A A A A A A A A A A A A A A

「うおおあああああ?」

ギガン・タイランから質量を伴って大音量が俺の方に飛んできて、  
俺の身体を竦ませつつ吹き飛ばした。

「はっ」

そのまま俺は木の幹にぶつかり、全身に軽くない痛みが走った。

「ぐ……ホ、ホイミ」

口から血が流れてきそうになるが、なんとか抑えて自分にホイミを  
唱える。

俺の手から緑色の光が出て、俺を包むが安心はできない。

G R U U U U U U U U U U U U U U U U

俺の至近距離まで近付いてきたギガン・タイランに向かって  
「ベタン」

敵の体力を何割か強制的に削り取る魔法を唱えた。

俺に噛み付こうとしていたギガン・タイランが仰け反る

俺はその隙に連続でベタンを放つ。

「ベタン」「ベタン」「ベタン」「ベタン」「ベタン」  
「ベタン！」

そして……ギガン・タイランは、倒れなかつた。  
「へ？」

どうやら、俺はゲームと同じで体力を削りきれると思っていたのだが、現実はず違ったようだ。

古代種は、魔法に耐性がある。

それが、誤算だった。

俺は怒りのこもったギガン・タイランのタツクルによって上空に打ち上げられ、尻尾を叩き付けられた。

「があっ!？」

俺はそのまま崖から下に落ち、川に着水した。

もがこうにも全身は熱を持ち激痛が走り動いてくれない。

川の水が鼻や口から流入する。

息が……できない……

意識がだんだんと薄くなっていく……そして俺の意識はぷつぷつと途切れた。

——こいつは、人間か!?

——熱がひどいし、骨が何本か折れておる!

——はやく、私の家に運ばなければ!

こえがきこえる……

いしきがもうろうとしている

おれはあれからどうなったんだ?

おれはいきているのか?

わからない……だんだんねむくなってきた……

からだがつかれてる

おやすみ……

俺はこのあと、ある人に助けられたが俺が起きるまでに3ヶ月も掛かることになる。

## イース8にドラクエの呪文を持ったチートオリ主が ぶち込まれた作品6

・・・  
・・・  
「ん？」

「ここどこよ？」

えーと、確か俺はギガン・タイランにぶつとばされて、川に落っこちたのは覚えていたがそこからが記憶にない。

目を開けるとそこはログハウスっぽいところだった。

たぶん誰かが俺を拾ってくれたんだろうが・・・

と、目を覚ました俺の視界に誰かが映る。

「父上くおきたぞー！」

「こいつ誰だっけ？」

「というか原作が思い出せん。」

たぶん強い衝撃を何度も受けたショックで知識ごとぶっ飛んだみたいだな・・・

幸い記憶までは吹っ飛んでなかったからよかったが。

こんなところで記憶喪失とかシャレにならん。

そこに壮年のおっさんがこっちに話しかけてきた。

「おお、目を覚ましたか。3か月も意識を失っておったからさすがにヤバいと思ったんじゃが」

「さっ、げほげほっ!？」

アカン喋るのが久しぶりすぎて喉があ・・・

「おお、ちよつと待つとれ。今何か飲み物を持ってくるからな」

「そういつておっさんは去って行った。」

3か月も寝ていたのか・・・どんな大怪我負ったんだよ俺は。

去って行ったおっさんの代わりに緑の髪の子が話しかけてくる。

「父上に感謝、する！わが名はリコッタ！父上の子供だ！」

元気いいなーこの子。  
リコツタか、思い出せんな。

そういえば、俺の今のステータスってどうなってんだろ？  
俺は口には出さずにステータスと唱えた。

そこには久しぶりに見る俺のステータスが・・・

名前：レン

性別：男

年齢：15

職業：魔法使い

レベル：28

HP：1050

SP：126

攻撃力：128

防御力：207

装備：

頭：なし

上半身：なし

下半身：なし

右手：なし

左手：なし

脚：なし

アクセサリ：なし

スキル：

【魔法制御：範囲】

【自動治癒：特小】

【服飾作製技能】

【鍛冶技能】

【精神力急速回復】

【杖の技：初級】

【魔法強化：初級】

魔法：

メラ  
イオ  
ホイミ  
バギ  
ザバ  
ベタン  
ベタン・改  
スカラ  
ルカニ  
ボミエ  
バイキルト  
ギラ  
ドルマ  
ヒヤド  
デイン  
ジバリア  
アタックカンタ  
マジックバリア  
バーハ

．．．．．なんか増えてね？

ステータスの部分が増えてたり減ってたりするんだけど？

かしこさとすばやさ、みりよくどこいったし。

レベルめっちゃあがってるしMPがSPになってるし、知らないうち  
にスキルが追加されてるしどうなってるんだ．．．

「お、どうした？まだからだ悪いのか!？」

「いや、なんでもないよ．．．」

たぶん、この世界の仕様にステータスが変化したんだろうが、なん  
でレベル上がってるの？

古代種と勝てなかったとはいえ戦ったからか？

それとも3か月の間死なないように体が頑張ったからか？

．．．．．ねよ。



「父上、このひと倒れたぞ！」

「起きたばっかりだから疲れが溜まっているんだろう。リコツタあんまり騒がないようにな？」

「了解なのだ！」

旧タイトル テロリストの首魁であるセンパイを助けろと頼まれた件について。

## 閃の軌跡×GOD EATER 1

銃声が走る、風切音が鳴る。

硝煙の匂いが立ち込める、爆音が響き渡る。

軍人たちの悲鳴が怒号が響く。

—— 救援はまだかッ!?

—— 何がどうなっているッ!?

—— 駄目だッ 歯が立たんッ!

俺たちは戦場を駆け抜けながら軍の主要施設に向かって駆ける、駆ける。

最悪の事態を防ぐため——。

人々の平穏を破壊しないため、戦争を食い止めるため、物語を誰かの筋書きを良い方向へ捻じ曲げるため——

駆ける駆ける駆ける——。

だが、物語がその程度で変わるわけではない。たとえば、俺というイレギュラーが混じって居たとしても変わることはない。

施設内部は既に血の海と化していた。施設内にいた軍人たちの血によって……。

錆びた鉄の匂いが立ち込める。中には傷口から臓物が飛び出している死体もある。

教官や俺を含め何人かは凄惨な光景に耐えられたようだが、幾人かは口を押えている。

—— そんなひどい……

委員長がそうつぶやく。

そうだ、幾らテロリストと云えどもここまでする必要があったのか——？

(でも、ここは現実なんだ。原作とは違う。

自分はまだ現実を見ていないんじゃないか…?前世でも大抵の場

合抵抗する人々をテロリストは殺していたりもしていた……。やはり、俺は現実を認められていないのかそれとも――)

【……結局のところ、原作って何なの?】

(済まないが、たとえクリスであっても教えられないんだよなあ……コレは)

——どうしたの?

——いや、なんでもない。

——さっさと行くわよ。テロリストたちの狙いは列車砲よ。急げば追い付けるはずよ。

二人で話していると、そんな風に教官から心配された。

まあ、一人だけうわの空だったら気になるか。

——これより、ツールズ士官学院特科クラスVII組一同、列車砲の起動を止めるためミッションを開始する。

日頃の成果を見せる時だ、教官たちを全力でサポートするぞ!

——『おおッ!!!』

(つと、移動開始か。さて俺はナイトハルト教官かサラ教官かどちらに割り振られるのか……)

【どっちでも、することは変わらないんでしょ?】

(テロリストの制圧だからな。一刻も早く列車砲を止めないとクロスベルが吹き飛びかねないからな)

【ちなみに、敵のおおまかな戦力は?】

(ほとんどは結社の人形兵器だろうな。あとは、猟兵のグループと帝国解放戦線の幹部達だろう。)

そう、二人で話しているとラインによるチーム分けが終わったようだ。

——俺とユース、ガイウス、ラウラに委員長はサラ教官と一緒に。

クリスとフィー、マキアス、アリサとミリアム、エリオットはナイトハルト教官と一緒に行ってくれ!

『了解!』

【結社の人形兵器って歯ごたえある?】

(モノによるが……まあそれなりに。あんまり、歯目を外すなよ？  
こっちだつてフオロー大変なんだぞ。)

パーティの始まりだ！  
【善処します】

(あー駄目だなあこりや。)

——クリス。みんなを頼んだ！

——うん。ラインも気を付けてね！

——行くぞツツ!!!

さて、神から言われた使命を守るためにクリス・レディアとその助  
言者逝きまーす。

## 閃の軌跡×GOD EATER 2

天界———強制労働施設そこは神々が人間の寿命を管理し罪のあるものは罪の浄化のために地獄へ

善行を重ねたものは善行を数値化しその量によって次の生で受ける幸せを少し増やす。

不慮の事故で死んでしまった者には神のお願いを託して別の時間軸へ送り出す。

とある神の処に一人の青年が現れた。

青年はあたりを見回している。

どうやら状況が読みこめていないようだ……

青年を見た神はいきなり土下座をして謝りだした。

———ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！間違えて殺しちゃいましたあ！ごめんなさいいいいいい！

なんでもしますから上司には言わないでください！苦節156年やっと中間管理職から解放されて時給も上がって休みも取れるようになったので告げ口だけはあああああ！

———あのー。あなたは誰でここは何処なんでしょうか？夢ですか？夢なら神機使いの力と神機が欲しいなあ……。夢が覚めたら、3rdのevoやらないと……。

青年は夢と勘違いしているのか、素直に言ってしまった。夢ならばこのまま夢を見て目が覚めた後友人たちにリアルな夢を見たと言ったりして話が弾むかもしれない———

これが夢ならば。

神の耳は青年の漏らした言葉を聞き逃さなかった。神様の耳は地獄耳である。

神は満面の笑みを浮かべて青年に言った。

———願い事受理しました！私からのお願いは閃の軌跡の世界に行ってクロウ・アームブラストを最終局面で死なせないようにしてください！その未来が見れるなら、死んだって……あ、死んじゃあ見

れませんね。

ではご要望どおり神機使いの能力詰めて、送り出しますね！

マシンガンのように自分の要件を述べた後、神は青年に手を突き出しました。

突如として神の前に真っ赤なドリルが出現する……すごく……大きいです。

——あ？ちよちよ何ですか!?その天でも抉れそうな真っ赤なドリルは!?ちよつ、夢なら覚めてくれよつ！動けッ動け俺のマイボデイ！

しかし、現実是非情だ神の腕の一振りによって青年は横倒しになりそこにドリルが迫る。

——やっやめツア——

青年の記憶はそこで途切れた。

青年の身体に人知を超える力の塊が注ぎこまれてゆく——

次に起きたとき青年は見知らぬ国、見知らぬ列車の中で目を覚ます

果たして青年は物語の流れを変えることはできるのか？

そして青年はこの急展開についていけるのか？

そして青年は3rdのevoをやることはできるのだろうか

……。

——あ、詳しい説明するの忘れてた。

——お主今日から下っ端な。

——げえっ！○○○様ア!?いやあああああ！私の休暇ああああ

!!!!!!

ガタン……ゴトン……。

身体が一定間隔で上下に揺さぶられている。

周りから話し声が聞こえる。

ここは何処だろう……。

俺は少し前まで部屋でゲームをやっている……変な夢を見て――

――意識が覚醒する。

目を開けるとそこには見知った自室の風景は無く――高級そうな列車の座席が見えた。

(ツ!? どこだ……此処……。)

――誘拐

脳裏にその言葉が浮かぶ。だが即座に否定する。ありえない。

俺という一般人を攫ったとしても相手にはまったくもって利益はないはずである。

周囲を見回そうとして、自分の身体が動かせないことに気づく。

縛られたかのように身動きできず、動かせるのは目だけのようだ。

かろうじて動かせる目あたりの様子を少しだけ見ることが出来た。

そこには緑色が主体の制服を着た高校生ぐらいの人々がいた。

しかし、表情はとても誘拐されてきたようには見えない。

そして、拘束されている感じはなかった。

ではなぜ、自分だけ動けない？

(というか、これは動かないというより、俺以外の意識があつて、そのせいで動かせないのか?)

と、俺が考えたとき

――よく気づいたのう。

声が響く。

その声には思わず平伏したくなるような不思議なオーラを纏っている。

(俺を動かさなくした犯人か?)

——いや違う。お主にちゃんとした説明をしていなかったからな。

説明?何のことだ?

——今お主の意識をこちらに引き寄せるからな。

その言葉の瞬間俺の意識はブラックアウトした。

目の前にどこかの魔法学校の校長のような髭の老人が座っている。そして妙に神々しい

。老人は俺が老人を認識するとおもむろにしゃべり始めた。

——さて、勝手に儂らの都合でお主の意思も関係なくそちらに送って悪かった。

深々と老人が頭を下げる。

——ここは何処なんでしょうか?そしてあなたは?

——此処は天界。本来ならば寿命を全うした魂や不慮の事故で命を落としてしまった人々が来るべき場所。儂はイザナギ。お主も日本人ならば聞いたことがあると思うが?

——本当に神様何ですか?俺は何故此処に?俺は死んでいないはずだが……。

——ああ。本当に濟まない。私の部下である神が死んでいないはずのお主を間違えて

呼び出してしまったようなのじゃ。

そして、あまつさえ『神の信託』でさえ課してしまうとは……。

——その、『神の信託』とは?俺は元の世界に帰してもらえますでしょうか?

——普通ならば間違えて呼び出してしまったとしても記憶を少し消して元の世界に帰せばいいのだが……。

——『神の信託』が邪魔をしていると……?!

——ああ。『神の信託』とは神々の願いじゃ。これを課される



と課された人間はその願いを叶えるまで天界に戻って来られないんじゃないよ…。

——あなたでは解くことはできないんですか？

——同じ系列の神々でも『神の信託』には強力なプロテクトが掛かって居ってな。

たとえば日本神話の上位の神である儂でもそのプロテクトを外すことは出来ないんじゃないか？

——その、俺に課された『神の信託』とはどういったものなんだろう？

——クロウ・アームブラストの救済じゃ。

——……………え？　クロウ・アームブラストは創作物の人物ですよ？

そうだ。閃の軌跡に出てくる人物クロウ・アームブラストはゲームの中の人物であり

其の最期は自分の人生がすべて鉄血宰相の手のひらの上で踊っていただけ

というものだった。

——そう、それが問題なんじゃ。普通ならば、物語の世界に跳ぶのは無理なんじゃ。しかし、お主を送った儂の部下は物語と得て非なる世界を作り出してそこに送り込んだんじゃ。

もちろん、矛盾がでないようにお主をその世界に元々存在する人物としてな。

こんなことをしてしまった者の上司として済まないが、どうかこの『神の信託』を成就させてくれないか？

成功させるためならば、どんな特典でもお主に授けよう。

——俺が元の世界に戻るには『神の信託』を成就しないとイケないんですよ？

——心苦しいが…そうじゃ。

——わかりました。では受けさせていただきます。

ここから俺の新たな生活が始まる——と  
思っていたんだが  
なあ。

## 閃の軌跡×GOD EATER 4

イザナギとの会話は続く。

つぎは俺の特典と俺のこの世界における立場を決めるそうだ。

——それで、お主の設定についてなのじゃが。お主、特典に神機  
使いの能力、神機と決めたじやろう？

——はい。それがどうしたんでしようか？

——儂の方でこの世界との擦り合わせを行った結果の設定がこ  
れじゃ。

---

名前：クリス・レディア

性別：男

年齢：17歳

使用武器：神機

オーブメント：空2風1／5—3

マスタークオーツ：霸王

アタックランク：不明

所属組織：武器メーカー《フェンリル：帝国支部》所属・性能検査  
技士

武器メーカー《フェンリル》：

近年エレボニア帝国を拠点として各地に新しいアイデアの武器を  
売る武器メーカー。

本部はカルバードにあるが、今のところ特に批判は出ていない。

主な販売物として、新型導力弾、充填式導力カートリッジ、換装兵  
装が存在する。

所長はヨハネス・フォン・シツクザール（45）

開発主任はペイラー・サカキ（47）

新型導力弾：武器メーカーフェンリルが開発した商品。弾頭に結晶  
回路を仕込み、敵の戦車や防壁にぶつかった際に導力魔法を展開し相

手の防壁に致命的な一撃を与えると、弾頭に仕込まれる結晶回路は使い捨てであり、はめ込まれる七耀石も本来捨てられるはずの七耀石の欠片を使用しているため、製造コストは段違いに低い。

充填式導力カートリッジ：武器メーカーフェンリルが開発した商品。本来なら戦術オーブメントなどの一部の導力機器は導力が切れ、てしまうと長時間使わずに置いておくか、使い捨てのカートリッジを使用しなければならなかったが、その手間を大幅に軽くした製品。一度使用してしまっても2〜3時間ほどで再び使えるようになる。

ただ、これが大幅に出回ると従来の商品が売れなくなってしまう、市場に大きな影響を及ぼすと思われるため現在のところ価格設定は高めである。

換装兵装：武器メーカーフェンリルが生み出した新たな概念。七耀暦1204年に発表され広まった。

特定の武器種を使用することによって魔獣の体内の導力バランスを乱れさせ体勢を崩すことによって致命的な隙を作り出せることが研究によってわかつている。

しかし、魔獣は基本的に複数で行動し、時には全く別の種類の魔獣と協力して襲いかかってくることもある。

そのときに活躍するのがこの換装兵装である。

換装兵装は基幹パーツに様々な兵装を取り付けることができ、フェンリルで開発された武器種は10種類の刀剣と銃に分けられている。

問題点としては、各兵装が重いことであろうか。

強度の問題で一番軽い刀剣の兵装であるショートブレードや銃の兵装であるアサルトであっても重さは0.01トリムもし、一番重い刀剣の兵装であるバスターブレードでは0.05トリムを超えるものがあるため一般人では所持しにくい難点が存在する。

また、基幹パーツに一度に取り付けることができるのは一つのみであり、現在フェンリルでは複数の兵装が取り付けることができる基幹パーツの開発と軽量化が行われている。

クリス・レディアはつい最近完成した第三世代の換装兵装のテストプレイヤーである。

また、武器メーカーフェンリルは本部こそカルバードにあるが立場は中立的な立場にあるため今回エレボニア帝国の《放蕩皇子》と呼ばれる、オリヴァルト皇子からクリスをトールズ士官学院に新設されるクラスに入学させないか？ と打診があったため本人の意思と第三世代の兵装の現地試験も含めての入学となった。

---

——というふうでよろしいかな？

——特典の神機使いの能力とはどんなふうなんでしょうか？

——主に身体能力の強化じゃ。それと、これは本来神機使いの能力ではないが、全アラガミのアラガミバレットを技として使うことができるようになっておる。

——戦闘中に神機パーツを変更したい場合は、頭の中で使いたい神機パーツを選択してそれを呼び出せば自動的に変更される。

——あと、スキルについてじゃが……。呼び出した神機パーツごとにゲームのように設定されておる。ただし受け渡しバーストや喚起率上昇などの一部のスキルは消滅して居るがな。

——説明ありがとうございます。

——では、詳しい説明も終わったのでお主の意識をもとに戻すぞ。

——一つ伝え忘れたが……まあ、すぐに気づくし大丈夫じゃろう。

——俺の意識はそこで列車内に復帰した。

——さほど時間は経過していないようだが――。

【君、誰？】

——突然、俺の横から声が聞こえてくる。

——俺が意識を横に向けると、そこには青い髪のサイドテールの青年がいた。

——（……もしかして、この世界の俺か？）

「この世界って言うのが、わからないけど……君は僕なのかな？ 雰  
囲気も似てるし。」

もう一人の僕っていう感じかな？」

(……………そんな感じかね。)

「おおーよろしく！ これからトルズ士官学校ってところに通うん  
だけど、向こうに知り合いはいないし、生徒兼講師みたいな立場に勝  
手に決められてるしで心細かったんだ！」

これは本当にこの世界の自分なんだろうか？ 些か元気すぎる気も  
するが。

(まあ、よろしく)

と、俺とクリスが脳内で話し合っていると車内放送が聞こえてき  
た。

——《今回はケルティック経由、バリアハート行き旅客列車  
をご利用いただきありがとうございます。——次はトリスタ、トリ  
スタ。——一分ほどの停車となりますのでお降りになるかたはお忘  
れ物のないようご注意ください。》

クリスは自分の隣りにおいてあった狼のマークが描かれたスーツ  
ケースを手にして降車準備を始めた。

白い花が咲き乱れる――。

春らしい陽気と共に少し甘い匂いも漂っている。

(確か、ライノの花だっけか？形は地球のユリに似ているが……)

俺がライノの花を見てそんなことを考えていると後ろから声を掛けられた。

「ライノの花が珍しいのか？」

振り向くと、黒髪の自分と同じ制服を着た青年がいる。

確か名前はリイン・シュバルツアーか……。

北の温泉卿ユミルのテオ・シュバルツアーの養子であり――

(おかしいな……。リインに関する詳しいことが思い出せない……。記憶が封印されているのか……。?)

【どうかしたの?】

(いや、リインに対しての知識が思い出せなくて……)

【え、僕この人と初対面なんだけど……。君知ってるの?】

あ、クリスは原作知識とか持ってないのか。えーと、良い言い訳は……

(俺は並行世界のクリスなんだ。だから、大抵のことは、知ってるんだよ。)

俺は苦し紛れの嘘をつく。 追及されそうだが……

【お、そうなの?じゃ、今度からわからないことがあつたら教えてね!】

コイツ、信じてるし……。

と、ここであわの空のクリスを心配したのか、リインから声が掛かる。

「おーい?大丈夫か?」

「おっと、ごめんねー。君が持っている武器が気になってね……。おっと自己紹介がまだだったね。僕はクリス、クリス・レディアだよ。」

「俺の名前はリイン、リイン・シュバルツァーだ。ところで君も——」

「きゃっ」

リインが話を続けようとすると、リインの後ろから金髪ツインテールの少女が出てきて、リインにぶつかっていた。

リインは転んでしまった彼女を助けようとしていて、なんとなく雰囲気的に自分はお邪魔かなーと思った二人はそそくさと学院へ向かった。

「ご、ごめん。大丈夫か？ ……すまない。俺がぼうつとしていたせいだな。」

「ううん。私も花に見とれていたからお互い様ね。——でも、ごくよさそうな街ね。」

駅の周辺にいろいろなお店が集まっている。

「ああ。俺も同じことを思っていたんだ。あれ？」

「？ どうしたの？」

「青色の髪の男子を見なかったか？」

「その人なら……さつき学院へ向かっていったわよ。」

「そうか……。」

「——最後に君たちに1つの言葉を贈らせてもらおう」

ツールズ士官学院講堂。

新入生たちが集まる入学式の締めくくりにツールズ士官学院のヴァンダイク学院長は響き渡るような声で

「こう新入生たちに学院創設者ドライケルス大帝の言葉を言い放った。」

『若者よ——世の礎たれ。』

「“世”という言葉はどう捉えるのか」

ヴァンダイク学院長の話しは続く。

「何をもって“礎”たる資格を持つのか」

「これからの社会を担っていくことになるであろう彼等に



「これからの2年間で自分なりに考え、切磋琢磨する手掛かりにして欲しい。」

ささやかな贈り物としての言葉を託す。

「——ワシからは以上である。」

拍手が沸き起こる。

そのなかでリインは頭の中で学院長が贈った言葉を反芻していた。

『“世”の礎たれ』か……』

言葉自体は短く、その意味は深い。

考えれば考えるほど思考の海に沈んでいく。

そんなリインに声が掛けられる。

「うーん、いきなりハードルを上げられちゃった感じだね？」

声を掛けられた方を見やると、赤に近いオレンジ色の髪をした少年がこちらへ顔を向けていた。

「ああ、さすがは《獅子心皇帝》と言うべきか。単なるスパルタなんかよりも遥かに難しい目標だな」

「あはは、そうだよね。」

少年は少し眉をよせてそう言った。

「自己紹介しないか？」

「いいよ。僕はエリオット。エリオット・クレイグだよ」

「俺はリイン。リイン・シユバルツァーだ。」

『よろしく。』

自己紹介を終えたリインはあることに気づく。

「そういえば……同じ制服の色だな。」

「うん、そういう事なんだろうね？」

エリオットはそれに同意した。

改めてあたりを見回してみると、自分たちのように赤い制服を着ている新入生はかなり少ないようだ。

「ほとんどの新入生は緑色の制服みたいだけど……。あ、向こうにいる白い制服は貴族の新入生なのかな？」

確かに新入生が座っている席の前から二列は白い制服の生徒たちで固められているようだ……。

「ああ、そうみたいだな。だが……」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

二人で話をしていると、式の終了を告げる声が聞こえてきた。

声が出た壇上のほうに目を向けると貴族風の男性教師がこの後行われることについて話をしていた。

「——以降は入学案内書に従い、指定されたクラスへ移動すること。学院におけるカリキュラムや規則の説明はその場で行います」

そう告げると男性教師は「説明は以上。——では解散。」  
と言って壇上を降りて行った。

新入生たちは立ち上がり男性教師の言われたとおりに行動すべく、ぞろぞろと講堂を出てゆく。

「指定されたクラスって……。送られてきた入学案内書にそんなもの、書いてあったっけ？」

「いや、無かったはずだ」

困惑するエリオットと同様にリインもその言葉に同意する。

「てつきりこの場で発表されると思っていたんだが……」

だがそんな様子は無く、他の新入生に取り残される形となつてしまつた。

リインはあたりを見回すと自分達の他にも数名、同じ制服を着こんだ者が同じように取り残されているのが目に入り、やはりこの制服の色に何か関係があるのではないかと考えていると、自分達を呼ぶ声が耳に入った。

「はいはい。赤い制服の子達は注目く。」

そこには先程の入学式において他の教官達と共に脇に控えていた紅色の髪の女性がいた。

「実は、ちよつと事情があつてね」

そう言うのと。

「——君達にはこれから『特別オリエンテーリング』に参加して貰います。」

と告げた。

# 閃の軌跡×GOD EATER 6

：クリス視点

特別オリエンテーリング。

そう目の前の紅い髪の女教師は言った。

「へ……？」

自分の前の方にいた緑の髪で眼鏡を掛けた青年があっけにとられたような声を出す。

マキアス・リーグニッツ。帝都出身で父親は帝都知事のカール・リーグニッツ。

とここまでは頭の中に情報が浮かんでくるのだがそれ以上は出てこない。

神からのプロテクトが掛かっている可能性はあるがもつと別の何かが起因している気がする。

また、ストーリーについての情報もほとんど出てこない。ここが学院の旧校舎であることは分かるのだが、それ以外の情報は一切思い出せない。

それはともかく

俺たちは学院裏手のいかにも何かありそうな建物の前に集まっている。

「ん、んんって……」

「士官学院の裏手……随分古い建物みたいだな」

オレンジ色の髪の少年——エリオット——がそうつぶやくと隣りにいたリインがそれに応える。

旧校舎の周りには木々がうつそうと生い茂り、地面は舗装などもされていないため、ずいぶん前から放置されているようだが……。

俺たちをここに連れてきた教師——サラ・バレストライン——は全員のいぶかしげな視線を受けながら説明をしようともせず、建物の入り口にあった施錠された大扉を開け放ちさっさと中に入っていた。

「こんな場所で何を……?」

「くっ……全く意味がわからないぞ……?」

金髪の少女——アリサ——とマキアスが至極当然ともいえる反応を示し。

「まあ、考えても仕方あるまい」

と蒼髪の少女——ラウラ——が独り言をつぶやいた。

その言葉が後押しとなったのか、次々と建物の中に入っていく。

俺も入っていいこうとして——視線に気づいた。まあ、俺が気づいたのではなく正確には

クリスが気づいたのだが。

クリスによると特に敵意や害意は感じないため俺たちはそのままスルーして旧校舎に入ってしまった。

——俺を訝しそうに見ている少女に気づかずに。

：フイー視点

あの青年は特殊部隊にいたのだろうか?

これが私が彼に抱いた感想である。彼が視線を崖の方に視線を向けるまで私は私たちを見ている人たちに気づかなかつた。ここからは木々に隠れていて崖は常識的に考えて見えないはず。

また、普通に生活している人なら今の状況で周囲に気を配る余裕はないはず。

私のような過去がなければ。

正直サラには感謝している。彼も私のようにどこかの猟兵团や部隊にいたのかもしれない。

旧校舎の中は薄暗く、照明の類もないようで窓から差し込む陽の光で何とか見えるといったものだった。

大広間の奥にある舞台上上がったサラ教官は

「——サラ・バレストライン。今日から君達《VII組》の担任を務めさせて

もらうわ。よろしくお願いするわね」  
と宣言した。

「な、Ⅶ組……!?!」

「そ、それに君達って……」

みなサラ教官の言葉に動揺し、それぞれが個々の意見を漏らす。

「ふむ……? 聞いていた話と違うな」

ラウラが顎に手をあてそう呟く。

「あ、あの……サラ教官?」

この学院の1学年のクラス数は5つだったと記憶していますが……。それも各自の身分や、出身に応じたクラス分けをしていると聞いたのですが……。」

眼鏡の女子——エマ——が事前に聞いていたクラスの振り分け方についての違いを述べる。

そうなる则该のクラスは学院側から入学する生徒には事前に伝えられなかった。

ということになる。

その言葉を聞いてサラは頷いて肯定するが、逆に否定もする。

クラスがⅠ〜Ⅴ組みしかなかったのは去年までの話であり、今年は新たに立ち上げられたため違うと。

その理由は

「君達、身分に関係なく選ばれた特化クラス——《Ⅶ組》が」

「特化クラス 《Ⅶ組》……」

「み、身分に関係ないって本当なんですか?」

アリサがⅦ組についての事情を追求しようとするが

そこに激しく問い詰めるような声が響き渡る。

「——冗談じゃない!」

そう叫んだのはマキアスである。

「身分に関係ない!! そんな話は聞いていませんよ!?!」

マキアスは身振り手振りを交えてサラ教官に食って掛かる。

「えっと、たしか君は……」

「マキアス・レーグニッツです!」

サラ教官に自らの名前を名乗った後もマキアスは話続ける。

「それよりもサラ教官！ 自分はとても納得しかねます！ まさか貴族風情と一緒にクラスでやっていけって言うんですか!？」

「うーん、そう言われてもねえ。同じ若者同士なんだからすぐに仲良くなれるんじゃない?」

「そ、そんなわけないでしょう!？」

サラは楽観的な意見をマキアスにいうが、マキアスは納得せずに首を左右に振って否定する。

そんな光景をマキアスの横で見ていた金髪の青年が大きく鼻を鳴らす。

それに反応したマキアスはイラついた顔で青年にも食って掛かる。

「……君、何か文句でもあるのか?」

「別に。〃平民風情〃が騒がしいと思っただけだ」

「これはこれは……。どうやら大貴族の〃ご子息殿が紛れ込んでいたようだな。その尊大な態度……。さぞ名のある家柄と見受けるが?」

「ユーシス・アルバレア」

彼は体を向け少し挑発するような顔で

「〃貴族風情〃の名前〃ごとき、覚えてもらわなくても構わんが」

と無然とした表情でそう言い放ったのだった。

ユーシスとマキアスの会話にはまたもや騒然となる。

《アルバレア》は帝国東部のクロイツェン州を治めており、帝国貴族の爵位として最上級である〃公爵〃を冠していた。

つまりは、ユーシスは貴族の息子という立場となる。

またエレボニア帝国における最も家格の高いとされる四大名門の一つに数えられている、帝国に住む者ならば知らぬものなどいない、大貴族の中の大貴族と呼べる存在なのであった。

そんななか、異国人風である男子生徒は首をかしげており、白髪の少女と青髪の青年は動じておらず、少女の方はあくびをしていたが。

「だ、だからどうした!？」 その大層な家名に誰もが怯むと思ったたら大間違いだぞ!」

自分が予想していたものを遙かに上回るビッグネームに氣勢を削

がれながらマキアスは反論する。

あと一つのきつかけで破裂しそうな雰囲気は漂っていたが、

「はいはい、そこまで」

手を叩いて二人をそう諫めると、全員の意識がこちらへ向くのを確認し、サラは言う。

「色々あると思うけど、文句は後で聞かせてもらおうわ。そろそろオリエンテーリングを始めないといけないしねー」

「オリエンテーリング……それって一体、何なんですか?」

「そういう野外活動があるのは聞いたことがあります……」

サラの言葉にエマとアリサが反応する。

リインはその言葉に校門で武器を預けていたことを思い出す。

「もしかして……門の所で預けたものと関係が?」

「へえ、いいカンしてるじゃない。」

そういうとサラはなぜか後ろに下がり、何かのボタンを押した。

「へっ!?!」

「わ!?!」

「きゃっ!?!」

「何っ!?!」

突然床が傾き急激な角度の変化に半数がバランスを崩し真っ暗な穴に落ちてゆく。

リインは耐えようとするが徐々に力が抜け滑り落ちてしまう。

近くの金髪の少女をなんとか助けようと、手をのばし――

―視界の端に天井にぶら下がる少女と傾いた床を蹴り上げて穴の外へ脱出する青髪の青年を目撃した――。

「こらフィー。サボってないでアンタも付き合おうの。あとクリス、あんたもちやつちやと行くのよ。」

「……めんどくさい。」

「これが試練じゃないんですか?」

「違うわよ……」

フィーがぶら下がっているアンカーから伸びたワイヤーをサラはナイフを投擲し絶ち切るとフィーは自由落下していく。

「ほら、あんたもさつさと行く！」

「りょーかい」

クリスも飛び上がって穴に落ちて行った。

「私の胃大丈夫かしら…」

誰もいなくなった大広間にサラの音が響いた…



薄暗い回廊に肉を引き裂く音が響く。

ブチブチと相手の肉を喰らうのは額に巨大な角を持つ魔獣である。襲われているのはコインビートル。ジメジメした下水道や薄暗い洞窟にすむ魔獣であり

群れを作って生活している。

そのコインビートルを喰らっている魔獣のあたりには甲殻を一撃で刺し貫かれた魔獣の

死体が散乱している。

あたりには、魔獣から出たであろう青黒い血によって池が出来ており巨大な角を持つ魔獣の脚はどす黒く変色している。

魔獣を粗方食べ終えた緑の甲殻を持つ魔獣に変化が起こる。

緑の甲殻に包まれた背中が割れ、そこから薄黄色の羽が二対生えてくる。

巨大な角を持つ魔獣は新たに生えた羽で新たなる獲物を探すために耳障りな音を流しながら飛んでゆく――。

---

：クリス視点

黒髪の青年の頬に手が向かう。

鋭いスナップを聞かせたその手のひらは黒髪の青年の頬を反応させずに叩いた。

パアンと自分たちが落ちてきた空間に響く。

【おお。クリティカルヒット！】

(確かにいい具合に入っていたがな)

アリスの平手打ちをくらったリインは衝撃にふら付きエリオットに心配されていた。

「リイン。大丈夫？」

「ああ…。厄日だ…」

【いや、そこは厄日だと言っちゃダメでしょ……。】

(ああ。確——)

【そこは、ありがとうございます！ でしょ!?!】

(お前は女子に叩かれたいのかつ!?)

どうやらリインはアリサを助けようとして自分がクツションになって助けたが、助け方が悪くアリサの谷間に顔を突っ込んでいたようにリインはすぐさま謝ったがアリサは羞恥に耐え切れずリインの頬を叩くに至ったようだ。

まあ、普通の男子からしたらご褒美に映るの……か？

皆が自分たちが落ちてきたこの空間に戸惑っていると、自分たちが腰に身に着けていた戦術オーブメントから音が鳴った。

そして各々が戦術オーブメントのカバーを開けると全員にサラ教官の声が聞こえてきた。

『それは、特注の戦術オーブメントよ。』

「——この機械からか？」

「つ、通信機能を搭載しているのか？」

ガイウスとマキアスがつぶやくとアリサが何かに気づいたかのよう  
うに声を挙げる。

「もしかして、これって…」

『ええ。これはエプスタイン財団とラインフォルト社が共同して開発  
した次世代の戦術オーブメントのうちの一つ——』

『第五世代型戦術オーブメント。』

『《ARCCUS》よ。』

「ARCCUS…」

「<sup>オーバルアーツ</sup>導力魔法が使えるという特別なオーブメントのことですね？」

『そう。回路に七耀石からできたクオーツを嵌めこむことで導力魔法  
が使えるようになるわ。』

『——というわけで、受け取りなさい。』

サラ教官の言葉とともに薄暗かった広間に光がともり、ここがさつき  
きまで自分たちがいた場所と同じぐらいの広さの大部屋であることが  
分かった。

『君たちから預かっていた武具と特別なクオーツを用意したわ。』

それぞれ確認したうえでクオーツをARBUSにセットしなさい。』

それで、サラ教官からの通信は途切れた。

「まあ、とにかくやってみるか。」

というラウラの声と共に彼らは自分の武具があるところへ向かっていく。

【あれ？僕に届いたARBUSにはマスタークオーツ嵌ってたんだけどなあ】

(そうなのか?)

【もしかすると、餞別でサカキ博士が嵌めたのかもしれないけど、博士たまーにとんでもない物作るから…】

(……………あの博士、ここでもマッドなのか。)

【うん？まあ、そうだね一度支部内をジュースで大混乱に陥れたし。】

この世界でもあのマッド博士は初恋ジュース作ったのか…

俺とクリスはアタッシュケースが置いてある台座へ向かう途中そんなことを話していた。

俺がアタッシュケースを開けると黒と黄金色の混ざった1.5mほどの剣と赤黒い盾、全体的にやや黄土色の銃身にピンクの小さなパーツ。

俺が前世のゲーム内で愛用していた神機が収められていた。

「なにあれ…」

そのアリサの言葉は各々の気持ちに代弁していた。

サラ教官からマスタークオーツを貰い、この建物から出るために入り口から出発しようとしていた矢先、クリスが先行しようとしていた。

リインは何が待ち構えているか分からないため止めようと声を掛けた。

そのとき振り向いたクリスが持っていたのは唾然とするほど異様な武器だった。

黒と黄金が交互に入り混じり禍々しい気配を放つ剣に赤黒い盾、黄土色の銃のようなモノ。

どれもこれも見たことがないうえリインと同じような腕で巨大な武器を片手で軽々と担いでいるのだ普通の感覚なら驚くだろう。

「な、なんなんだその武器は!?!」

マキアスがこらえきれずに叫ぶ。

「ん?ああ、これ?これは僕が所属している会社が作成した武器だよ。」

「もしかして、最近話題の換装武器っていう新しい武器のこと?」

エリオットが尋ねる。

「ああ。これは武器メーカー・フェンリルが手掛けた換装兵装の第三世代の試作品だよ。僕はフェンリルの試作品の实地試験を行っているね、今回データを採るために学院に持ってきたんだよ。」

「重くないのか?」

「んー答えでもいいけどそろそろ实地試験に移りたいんでね、ちやっちやと行かせてもらおうよ。じゃあ、バイバイ!」

そういうとクリスは走って行ってしまおう。

クリスが行ってしまったって少し経った後、今度はユーシスが迷宮に向かっていこうとする。それに対してマキアスが声を掛ける。

「いきなりどこへ…。一人で勝手に行くつもりか?」

「馴れ合うつもりはない。それとも『貴族風情』と連れ立って歩きたいのか？」

自分の発言を皮肉で返されマキアスは「ぐっ」と言って返答に詰まってしまう。

それを見たユーシスは明らかに挑発するような物言いだ。

「まあ——魔獣が怖いのであれば同行を認めなくもないがな。武を尊ぶ帝国貴族としてそれなりに剣は使えるつもりだ。貴族の義務として、力無き民草を保護してやろう」と言い放った。

それに対してマキアスは

「き、貴族に守られなくても僕は魔獣を蹴散らせる!!!」

と怒って叫び、肩を怒らせながら迷宮へと走って出て行ってしまふ。

ユーシスはマキアスの発言に鼻を鳴らして迷宮へと去って行ってしまった。

残された7名は呆然としていたが、ラウラが再起しある提案をした。

「とにかく我々も動くしかあるまい。念のため数名で行動することにしよう。」

アリサ、エマ、フィーに顔を向けながらこう言った。

アリサとエマはこれに対して

「え、ええ。別に構わないけれど。」

「私も…正直助かります。」

と賛同したが、フィーはラウラたちの制止を聞かず一人で行ってしまった。

そのあとはラウラたち女子三人は迷宮の中に入っていき、広間にはガイウス、エリオット、リインの三名が残っていた。

彼等はそれぞれ自己紹介と自らが使う武器について簡単な説明をしあって、迷宮に入ってしまった。

斬撃が奔る、火の玉が飛んでゆき魔獣の身体に当たって弾ける。大きく仰け反った魔獣の喉に槍の鋭い一撃が突き刺さる。

「崩したっ！」

「追撃行くぞっ！」

「止めだ！」

槍を突き出したガイウスが魔獣から槍を引き抜くと、魔獣は血を吹き出しながら崩れ落ち淡い燐光と七耀石の欠片を残して消え去った。

「だんだん慣れてきたね！リイン。」

「ああ。最初はどうなるかと思っただけど」

「連携も幾分か上手くなって来たな。」

一番最後に大広間を出てきたリインたちは最初の戦闘を危なげなく終わらせ、現在は迷宮の半分ぐらいまで到達していた。

——カサ

「ん？」

「どうしたのリイン？」

「いや、なんでもない。」

「それにしても、二人はすごいよね全然疲れてないみたいだし。僕はちよつと疲れが出てきたみたいで……」

よっこいしょ とエリオットは迷宮の床に腰を下ろす。

「まあ、俺とガイウスは故郷が自然に近いからか魔獣と戦う機会が多かったみたいだし」

「そうだな、直に慣れるさ。」

「そうだといいいけどね……」

——ブウウウウン、ブウウウウン

「！」

「おい……！」

「え……」

リインたちがいた場所の上の通路から魔獣が現れる。その姿は緑色の甲殻に薄黄色の羽巨大な緑の角を持った魔獣だった。

「くっ、新手か！」

「エリオット下がれ！」

「う、うん」

臨戦態勢をとる三人の前に悠然と降りてきた魔獣は猛然と突っ込んできた。

すぐさま三人は散開してそれを避けた。

攻撃を避けられた魔獣はそのまま直進し壁を『抉り取り』ながら旋廻した。

『!?』

それを見たリインたちは驚愕する。なぜなら先ほどまでの戦闘で武器が床や柱に当たっても弾かれるだけで傷などつけることはできず、それは魔法も同様だった。

驚く三人をよそに魔獣が再度突進してくるリインとガイウスが避けるが、エリオットは一瞬遅れてしまい、それが悲劇を呼び出す。

エリオットの腕を魔獣の身体が掠り、一瞬で服が裂け腕に裂傷を作り出す。

「あ、あああああああああああああ!!!?」

エリオットは壮絶な痛みにも声を抑えずに床をのた打ち回る。傷口からは少くない血が流れていく。

そこに追い打ちを掛けようとする魔獣。

「え、エリオットツツツ!!!」

リインはエリオットを抱えて横に転がる。

ガイウスは飛んできた魔獣の腹に槍を振るうが当たった瞬間、槍の穂先があっけなくへし折れる。

「なっ!?ガッ!」

そんなガイウスに魔獣が体当たりを仕掛ける。

かろうじて避けたガイウスだが衝撃で壁に叩き付けられる。

「ガイウスッ!」

魔獣は矛先をエリオットからガイウスに変更する。

こちらに飛んでくる魔獣にガイウスが死を感じたそのとき。

廊下の奥から銃弾が飛来し魔獣の胴体にぶち当たった。

魔獣は自分のその飛行スピードが仇となり吹き飛んでいく。

「君たちッ！大丈夫か!？」

ライフル銃を持ってこちらに走ってくるのはマキアス・レーグニツツとエリオットの叫び声を聞いて走ってきたエマとアリサとラウラである。

「ひどい怪我ですね。今すぐ治療します!」

エマはそういって治療用の魔法をすぐさま発動させる。

青白い光がエリオットの腕に降りかかりすぐさま傷をふさぎ癒してゆく。

その向こう側ではガイウスがアリサによって治療用のアーツを掛けられて、なんとか持ち直しマキアスに肩を支えられていた。

「何があつたのだ?」

「ああ……」

リインはラウラにこの状況を説明した。

魔獣を倒してひと段落して休んでいたら唐突に巨大な角を持つ魔獣が現れたこと。

その魔獣はとてつもなく硬質な迷宮の壁を抉り取るほどの頑丈さを以ていること。

エリオットの腕にかすただけでエリオットは腕に重傷を負ったこと。

マキアスが駆けつけなければガイウスが死んでいた可能性があること。

それを聞いたラウラたちは疑問を呈した。

「なぜ、サラ教官は我々をここに攻略させたのだ?そのような危険な魔獣がいたのならばここでオリエンテーリングをしようとは思わなかったはず。」

「ということは、知らぬうちにその魔獣はこの迷宮に入り込んでいたということか……?」

ところで、話は変わるがガイウスの槍をへし折るほどの甲殻を持つ生物が通常のライフル銃の銃弾ぶるときで死ぬだろうか?いや、そんなことはない。



彼らはすぐに其の場から離れるべきだった。  
魔獣が戻ってくる前に。

——ブウウウウン、ブウウウウン  
その音にいち早く気づいたのはエマだった。

「ツ!!みなさん逃げますよツ!!」

「なっ!!」

マキアスは驚いた。

通路の奥へ吹き飛んで行った魔獣の甲殻には銃創が一切なかったのだから。

「みんな急いで撤退するぞー!」

リインはそう叫びエリオットを担いで駆けだす。

ラウラはガイウスに肩を貸しながら逃げる。

アリサとマキアスは弓と銃を撃ちまくって牽制しようとする。

当然彼らの意識は魔獣に向いており床に落ちているものには気づかなかつた。そう気づいていなかった。

「きゃ…」

アリサが何かに蹴躓くアリサの足元にあったのは先ほどへし折れたガイウスの槍の穂先だった。

「あ……」

アリサの顔が絶望に染まる。マキアスが手をのばそうとしているが、間に合わない。あとほんの数秒でアリサは胸を貫かれ即死するだろう。

アリサの脳裏に走馬灯が映る。ああ、自分はここで死ぬんだとあきらめが浮かぶ。

そんなアリサと魔獣の間に筒が投げ込まれ、爆発的な光が迸った。

「ギリギリセーフ」

「ギリギリセーフ」

昏倒した魔獣の前に姿を現したのは白髪の少女。

魔獣がアリサを殺そうとする直前に閃光弾を投げ入れアリサを間一髪で救い出した。

その姿にリインたちは一瞬唖然としていたが、白髪の少女に向かって礼を言う。

「あ、ありがとうございます」

「ん。」

白髪の少女は簡潔に答えると昏倒しているアリサをリインに渡すところ言った。

「目くらましをしたただけだから、この魔獣もそのうち回復するかもしれないから、今のうちに安全な処まで逃げるよ。」

そう言うと白髪の少女は走り出す。

それを見たリインたちは協力して、負傷者を運びながら慌ててついていく。

その数分後魔獣は頭を揺らしながら起き上り、自分の獲物が逃げたしまったことを悟ると耳障りな音を挙げながら獲物を探し出そうとする。

その瞬間何を感じたのか、魔獣はその場所を離脱しようとする。

そんな魔獣の上から影が落ちてきて避け損ねた魔獣の脚を引き裂きながら降り立った。

「…なんで、ここに高位魔獣が湧いてるんだらうね。」

落ちてきたのは巨大な武器を携えた青髪の青年。

「まあ、倒しますか。」

クリス・レディアが。

現在、クリスの頭の中では様々な会話がなされていた。

(なぜ、ドレッドパイクがここにいる?)

【? ドレッドパイクって何?】

（俺たちのほうだと、こいつはドレッドパイクって呼び名だったんだよ。ところで高位魔獣って何？）

【簡単に言うと、七耀石による補助を持たない魔獣かな。一説では普通の動物が魔獣に対抗するために進化したのではないかとも言われているけど。】

（こつちだと、特異な生物が各地の生物を喰らってその姿を模した奴が出ていたがな…）

【その話、後で聞かせてね。高位魔獣についての研究もそこまで進んでいるわけではないから、いい刺激になるかもしれないし。】

（ああ、わかった）

「さて、お前の相手はこの僕だ。ちようど腕試しがしたかったんだ。すぐに死ぬんじゃないや、楽しくないよね？」

クリスが武器を構えると、戦術オーブメントが黄金色の光を放ち始める。

その光は戦術オーブメントを離れクリスに纏わりついていく。

瞬間。

クリスから黄金色の粒子が湧き始め、武器も光を纏う。

「へえ、これが疑似解放状態か…いい感じだね。」

その力の奔流を見て逃げることは出来ない<sup>デミ・バーストモード</sup>と悟ったのか、魔獣も臨戦態勢に入り――

「さあ楽しいパーティの始まりだアアッ！」

――激突した。

迷宮の終点まで逃げてきたリンたちの耳は轟音をとらえる。

「ッ!?なんだッ!？」

「たぶん、誰かがあの魔獣を戦っているのかも。」

「た、助けに行かないと!」

「そうしたほうが、いいけど。そうも言ってもらえないみたいだよ。」

フィーがそういつて指をさす。

「何…?」

フィーの言葉にラウラがフィーが指差す方を見つめると終点の壁にある石像が動き出そうとしていた。

「せ、石像が動き出しただと……!」

マキアスがその事実には驚愕する。

石像の外皮が剥がれその中から青色の鱗を持つ魔獣が飛び出してくる。そして、魔獣はラインたちに向かって咆哮すると魔獣の周囲に新たな魔獣が産み落とされる。

「マキアスとガイウスとエマは俺と一緒に来てくれ! ラウラとフィーはエリオットとアリサを頼む!」

ラインは石像が変化した魔獣とその取り巻きを迎え撃つため即座に体勢を整え指示を出す。

「「了解!」」

こうして迷宮から脱出するための最後の戦いが幕を開けた。

決着は一瞬だった。

ロングブレードの刃がドレッドパイクの顔面にめり込み一撃で吹き飛ばした。

ドレッドパイクはそのまま迷宮の壁にめり込み赤黒い血を吹き出しながら破裂した。

血の雨が飛び散りクリスの顔や服に掛かる。

血が掛かったクリスの胸中に渦巻いているのは嫌悪感ではなく、不完全燃焼による退屈感だった。

「……つまんない」

クリスの見立てではそれなりの好勝負になると思ったのだが、結果は圧勝。

クリスはここまでの戦闘でロングブレードしか使っておらず、ここに来て銃や盾の性能が試せると思っていたのだがアテが外れてしまった。

「あーあ。やっと僕とまともに戦える敵が出てきたと思ったんだけどなあ……」

クリスがそう呟くとクリスの後ろからそれに応えるように声が掛けられた。

「へえ、じゃあ私が相手してあげよっか？」

「……サラ教官覗き見なんて感心しませんね」

「そりゃあ、つけっぱなしにしておいたラインの戦術オーブメントからエリオットの悲鳴が聞こえてくるんだもの。見捨てちゃ教師どころか人間として失格だからね。」

そうしてあの穴から降りて急いでいたらアンタが戦っているのに遭遇したってワケ。」

「盗聴までしてたんですか？」

「まあ、万が一のためよ。今回はそれがよかったのだけれど。ところで、アンタのその力は何？」

「僕専用の戦技ってことで今は納得してくれませんか？」

「…………。ま、アンタが誰かに害を及ぼす気がないなら今はそれで納得してあげる。ただし、そのうちちゃんと説明しなさいよ?」

「りょーかい。教官」

とクリスとサラの話合いが終わるとクリスの身体から光が消え、武器からも輝きが消失する。

「わかったならいいわよ。けど、あんまり問題を起こさないでね。」

サラはその光景を見ながらため息を吐く。

そのとき二人の耳に迷宮の奥からかすかに魔獣の咆哮が聞こえる。

「お、ラインたちも戦いが始まったか。」

「そうみたいね。んじゃ、私は向こうに先回りするけどアンタはどうするの?」

「僕はのんびりと向かいますよ。今のところさっきのヤツ以外に気配はなさそうですし。ちゃんと倒せるように調整してあるんでしよう?」

「そうね、よほど油断しなければ勝てるわよ。ところで、アンタホントに一般人?」

「いちおう、フェンリルに入る前は一般人ですよ。」

「ホントかしら……。じゃ、またあとでね。」

そう言うとサラは来た道を急ぎ足で戻っていった。

「…………さてと、じゃあラインたちの戦闘が終わるまでゆっくりと散歩しますか。」

クリスはそう呟くとこれからの予定を頭の中で組み立てながら歩き去っていった。

サラ教官と別れた後、ゆっくりと敵を倒しながら移動した俺は迷宮の終点にたどり着く。

そこでは真価を発揮した戦術オーブメント《ARCS》によって俺を除いたVII組の全員が淡い光に包まれ、熟練の兵士のように連携しこの迷宮のボスであるイグルートガラムに止めをさす瞬間を目撃した……

20分前

迷宮を出ようとしたリインたちの前に現れたのは広間の石像が変化した魔獣―イグルートガラム―と魔獣が呼び出した一つ目の魔獣だった。

リインはすぐさまみんなに指示を飛ばし、気絶しているアリサとエリオットを守るような位置取りをすると狙いを定める。

リインの武器は刀。

特徴を挙げると切れ味は高いが、ガイウスの槍と比べるとややリッチは短い。

敵は石像から変化した魔獣であり、外皮は鱗に覆われていて堅そうである。

リインはそう観察すると肉が少ない関節部を狙い始める。関節部を集中的に攻撃することで転倒を誘発させようとする。

リインは相手の攻撃を避けながら関節部を狙う。

ガイウスは注意を自分に引き付けようと果敢に相手の頭部に陣取って攻撃する。

イグルートガラムは鬱陶しそうに頭をを振ると口からブレスを吐こうとする。

そこにエマのーツによって召喚された魔法剣が飛び込み、今まさに口から飛び出そうとしていたブレスに直撃。爆発する。

その衝撃で口から血しぶきをあげながら叫び声を挙げる。

リインたちがその声に一瞬怯むと、イグルートガラムの周囲にいた

魔獣がキィキィと声を挙げながら目から黒色の渦巻き状の魔力弾をリインたちにむけて掃射する。

リインとガイウスはそれをもろに受けて吹っ飛ぶ。

それを好機と見たイグルートガラムはリインに狙いを定めて跳びかかるように飛んできた銃弾に身体を挟まれ体勢を崩す。

攻勢にでようとして、逆に隙を与えてしまったイグルートガラムに斬撃と魔法が襲いかかる。

硬い外皮に火球が襲いかかり、その身を石で出来た槍が串刺しにし、鋭い一撃で目が挟まれ、刀によって千切られたイグルートガラムは倒れ伏し、リインたちは止めを刺そうと近づく。

そこに取り巻きの魔獣が魔力弾を放ちリインたちは咄嗟にその場を離れる。

——瞬間。

イグルートガラムから紫色の暴風が吹きだして、それは取り巻きの魔獣を取り込んでさらに大きさを増していく。

数秒後、風が吹きやむと中から巨大な翼をはやしたイグルートガラムが出現する。

イグルートガラムは一啼きすると舞い上がり、先ほどとは段違いの速さでリインたちを攻め立てる。

エマが戦術オーブメントを起動させアーツを放とうとすると、それを妨害するかのように局地的な暴風を巻き起こして詠唱を中断させ、マキアスが銃を放とうとするとリインやガイウスが障害物になるように移動し、リインやガイウスが近づけば即座に空に飛び上がり魔力弾やブレスを吐き出して遠距離攻撃を仕掛ける。

リインたちも気絶から回復したアリサたちの援護を受けているが決定的な一撃を充てることが出来ずこう着状態に陥っていた。

イグルートガラムはリインたちの後方にいるアリサやエリオットが邪魔になると考えたのか魔力弾でリインたちを牽制しながらアリサたちの方向へ飛んでいく。

それを見たラウラとフィーはイグルートガラムに立ちふさがるが、機動性能はあちらが上であり不意を突かれて素通りされてしまう。



支援陣に攻撃しよとした瞬間迷宮の方から騎士剣が飛来しイグルートガルムの翼の根元を打ち抜き片翼を失ったイグルートガルムは大きくバランスを崩し落下する。

「危機一髪か？」

「き、君は!?!」

聞えてきた声に真っ先に反応したのはマキアスだ。

なんせ迷宮に落とされる前までいがみ合っていた『貴族』の声が聞こえてきたのだから。

「ユーシスか！」

「ああ。ほかの誰に見える？民を守るのは上に立つものの務めだ。だから、俺もこの戦闘に参加させてもらおう。」

ユーシスはそう言っただけで騎士剣を拾い上げると地に堕ちたイグルートガルムに切りかかる。

リインたちもこの好機に一気にケリをつけるためイグルートガルムに襲いかかる。

そのとき、

リインたちを淡い光が包む。

——見える。

全員の攻撃の軌跡が全て見える。

まるで全員が何年も一緒に過ごしてきたように手に取るようにわかる。

アリサの弓から矢が放たれ、イグルートガルムの目に突き刺さり仰け反り、その瞬間翼にマキアスの放った銃弾とエマの放った魔法が突き刺さり、翼が爆散する。

リインの刃が後ろ脚を斬り飛ばしそこに間髪なくガイウスの槍が突き刺さる。

暴れるイグルートガルムの手足をかいくぐりファイが腹に一撃を叩き込む。

がら空きになった首にエリオットから放たれた魔力弾が撃ち込まれへこませ、そこにユーシスの斬撃が叩き込まれ、止めにラウラの大剣が振り下ろされイグルートガルムの頭を胴体から完全に断ち切つ

た。

途端、淡い光は消失し、ようやく終った戦いに全員の緊張の糸がほどけ脱力する。

そんななかリインが呟く

「もしかしていまの力が——？」

「そう、《ARCCUS》の真価ってわけ」

全員が見上げると、サラ教官が拍手をしながら降りてくる。

「いや、やっぱり最後は友情とチームワークの勝利よね。うんうん。お姉さん感動しちゃった。これにて入学式の特別オリエンテーリングは全て終了なんだけど……」

サラは全員を見渡すと首をかしげながら

「なによ。もっと喜んでもいいんじゃない？」

「よ、喜べるわけじゃないでしょう!」

「正直、疑問と不信感しか湧いてこないんですが……」

「僕は、一度死の淵に追いやられかけたんですけど……」

いろいろな文句が飛び交う。そんな中、ユーシスがサラに問いかける。

「単刀直入に問おう——特科クラス《Ⅶ組》……一体何を目的としているんだ？」

まっすぐな質問にサラはこう答える。

「さて——約束どおり、文句の方を受け付けてあげる。ツールズ士官学院はこの《ARCCUS》の適合者として君たち10名を見出した。やる気のない者や気の進まない者に参加させるほど予算的な余裕があるわけじゃないわ。それと、本来所属するクラスよりもハードなカリキュラムになるはずよ。それを覚悟してもらった上で《Ⅶ組》に参加するかどうか——改めて聞かせてもらいましおうか？」

しばらくの沈黙の後、リインが一步踏み出しサラ教官に言う。

「リイン・シユバルツァー。参加させてもらいます。」

「……リ、リイン!？」

「ええっ」

その言葉にエリオットとアリサは驚く。

「一番乗りは君か：何か事情があるみたいね？」

「いえ：我俣を言わせて行かせてもらった学院です。自分を高められるのであればどんなクラスでも構いません。」

そうリインが言うと、ほかのメンバーも次々に参加を表明する。

そしてこの場で参加を表明していないのは二人だけとなった。

「で、君たちはどうするの？」

参加を表明した7人の視線が二人に集中する。

その残った二人のうちの一人であるマキアスは「すぐに仲良くなるわよ」というサラの言葉に反発する。

「そ、そんな訳ないでしょう!?! 帝国には強固な身分制度があり、明らかな搾取の構造がある！その問題を解決しない限り、帝国に未来はありません！」

「うーん、そんな事をあたしに言われてもねえ。」とサラ教官は明らかに面倒そうにするが、マキアスのこの言葉にユーシスが反応した。

「——ならば話は早い。ユーシス・アルバレア《VII組》への参加を宣言する。」

ユーシスはマキアスに視線を向けながら参加を表明し、そこからは参加を決めたユーシスがマキアスを煽り、彼も参加を決める。

結局のところ二人共参加する事になり、サラはいがみ合う二人を見て嘆息していた。

「で、アンタはどうするの？」

サラのその言葉にマキアスとユーシスはいがみ合いを止めて振り返る。

そこには迷宮の中では一切会うことはなかったクリスの姿があった。

「そんなの決まっていますよ。——クリス・レディア。特科《VII組》に参加させてもらいます。」

クリスはそう告げた。

俺は、<sup>クリス</sup>寝不足だった。

それはⅦ組が結成されたすぐ後のこと。

教室に戻った際にサラ教官からエリオットの「死にかけた」という言葉について聞かれた。

クリスとユースを除いた全員からサラ教官に抗議の声が上がり、慌てたサラ教官はエリオットに重傷を負わせた魔獣についてリインに尋ねた。

リインからその魔獣の特徴を聞かされたサラ教官は深刻そうな顔になり、「学院長に伝えてくるわ」といつて教室から出て行ってしまったのだ。

それから数分後教室に学院長とサラ教官が戻りその魔獣についての説明を始めた。

「いゝゝアンタたちが遭遇したのは高位魔獣って呼ばれてる魔獣よ。ただし、普通の魔獣と違ってとてつもなく強いよ。しかも、生半可な武器じゃその頑強な皮膚に弾かれてしまいかガイウスが体験したみたいに武器がへし折れるっていうことが起こるわ。」

でも、付け入る隙もあつてね、アイツらはなぜか他の魔獣と違って七耀石を一切体内に含んでいないの。

他の魔獣は七耀石を摂取することで皮膚に薄いコーティングが出来たり、摂取した七耀石に対応した属性に強くなったり、簡易的な結晶回路が出来ることでアーツを放ったりするワケ。

だから、摂取していない高位魔獣は頑強な皮膚を持っていて物理攻撃に強い反面その皮膚の表面には一切七耀石によるコーティングがないおかげでアーツはものすごい効きやすいのよ。もちろん、下位のアーツじゃまともなダメージソースにはならないんだけどね。」

サラ教官から一通りの説明を聞いた後

今度は学院長から説明があつた。

「近年、周辺国で高位魔獣の出現が相次いでいてな、基本的に高位魔獣



ど…」

と、寮の部屋の扉を開けた俺たちを待ち構えていたのは授業のための資料や武器のレプリカなどが乱雑に積まれた部屋だった。

「えー。これ整理するの？」

(みないだな…)

それから部屋の片づけが始まり、俺が就寝できたのは朝の3時すぎだった…

さて、寝不足で倒れそうな俺たちだが今日は授業の初日であり、午後からは高位魔獣に対しての授業を（主にクリスが）行わなければならないため休むわけにもいかない。

クリスが眠気ですぐにも閉じてしまいそうな目で学院への道を歩いていると、俺の意識に神様が声を響かせてきた。

———そういえば、お主の原作知識の制限についてなのじゃが。

———制限：ですか？

———そうじゃ。お主が原作知識をうっかりクリスに話してしまうとマズイことになる。

たとえば、トマス・ライサンダー。彼は星杯騎士団所属じゃが……。彼が星杯騎士団に所属している情報を知ったうえでクリスが彼と話す、相手はクリスに違和感を抱くじゃろう。

その結果クリスが星杯騎士団の極秘情報を知っているとかわれてしまうと少々面倒なことにつながるじゃろうな。

———というと？

———クリスが星杯騎士団に捕まる可能性があるということじゃよ。そうなってしまうえば原作を改変するどころかクリスの命が危なくなる可能性がある。

そのような結末を防ぐために原作知識の一部……人物についての情報を封じることにしたんじゃよ。

ストーリーの大まかな流れはわかっているけど、誰がここでこう動くという情報はわからないからお主の動きが阻害されることはそうないじゃろう。

それと、原作知識についてはクリスに話す分にはフィルターは掛からんが、人物や組織に関する情報はクリスがその情報を少しでも知っていない限り話してはならん。

無理に話そうとすると、お主の魂は休眠状態に入ってしまうので要注意じゃぞ。

と、神様は言いたいことを伝えると通信は切れてしまった。

【おーい。大丈夫？返事が返ってこないけど。】

(あ、ああ。大丈夫だ。)

気づけば、もう教室の前に立っており、扉の隙間から見える時計は一限の授業開始10分前をさしている。

(ところで飯はどうしたんだ?)

【えーと、キルシエっていう喫茶店があったけどいま持ち合わせがないんだよね…】

(は?)

財布を見せてもらおうと、1ミラも入っていないかった。

(な、なんで1ミラも入ってないんだ!?)

【銀行ぐらいあると思ってたんだけど、なくてね。全財産銀行に入れたままなのさー!】

(……トリストタから一番近い銀行のある街ってどこだよ。)

【えーと……バリアハートだね。】

(どうするんだよ。休日まであと5日もあるぞ?)

【給料の前借させてもらおうかな……】

(しようがないっちゃあ、しようがないな)

果たして、新任教師に給料の前借ができるのか疑問だが、この一週間で飢えをしのぐにはそれしか方法がなかった――。





「ああ、なんで人間はこんなに脆くて弱いのでしょうか？やはり試作品程度では耐えられませんか……。どうにかして、あの方が満足するような個体を見出さねばなりませんね。」

「世界の終焉を齎しましょう。」

「ええ。『私』の願い私が叶えましょう」

そう彼女は呟くと唇に付いた血を舐めとり車椅子を動かしながらその部屋を出て行った。

#### 帝都・ヘイムダルのバレット地区

そこにあるフェンリル帝都支部の執務室では白髪の男性が大量の資料を広げて唸っていた。

「やはり、これは事実なのかねえ……。高位魔獣が集まるところには何かしらの大事件が発生するというのは？普通だったら噂程度の物なんだらうけどどうも事実が上がっているとなあ……」

唸っていると、扉が開き金髪の白いコートを着た男性が部屋に入ってきた。

「ペイラー。やはり、最近の帝国全土で高位魔獣の発見・遭遇報告が増えているのには何かしらの関係があるのかね？」

「おそらくその可能性は高いだろうね。でも、僕たちが帝国政府に訴えかけたところで信じてはもらえないだろう。ただでさえ帝国政府からしたら僕たちは共和国のスパイだと思われているだろうし潰されかねない。」

「しかも、最近ではフライヤで怪しい実験が行われていると雨宮君から報告を受けている。先にこちらを片付けて置かなければのちに厄介なことになるだろう。」

「しかし……。本物とは違うとはいえあちらの世界で確認されていた墮天種や神融種までいるとは……。」

「私はそのとき既に死んでいたが、まことに厄介な事案だなこれは。」

「そうだね、ヨハン。まさか、時空を超えて全く知らない世界に来てしまおうとは僕は夢にも思っていなかったよ。」

「問題はペイラーだけではなく既に死んでいるはずの私や、神機や機材までここに移動してしまっている　ということだな。」

「安心できるのは、こちらに来てから神機は一切稼働していないどころかアラガミ関連の素材が暴走を起こさないことだけかな。」

「アラガミ・・・いや、高位魔獣か。現在のところ小型しか確認されていないようだが、中型や大型が出てくるとなると早急に新たな対抗する武器を作らなければならないな。」

「僕たちの時には完成していた神機兵を作りたところだけど、あれは生産コストが高いうえに、アラガミの合成筋肉を使用しているからこちらでは作成が不可能なんだよね。」

とペイラーが呟くとヨハネスは懐から一枚の報告書を取り出しペイラーに差し出した。

「・・・これは？」

「・・・最近、ルーレのラインフォルト社のある制作チームが妙なロボットを作っていたらしくてな。潜り込ませておいた工員から伝えられた情報だ。」

「・・・ほう、これは使えそうだね。よし、早速開発部に回してみるよ。」

「頼んだぞペイラー」

彼らの話合いはそのあとも続き、金髪の男性の息子が呼びに来るまで終わることはなかった。

結果的には、俺たちはサラ教官から前借で給料をもらうことに成功した。

ただし……………

「手合せかぁ……………」

（あの教官だからな。教官の立場からすると生徒相手に全力で戦うことは出来ないだろうし、ましてやリインたちはひよっこだからな）

「いちおう、僕も対人戦の経験はいくらかあるけど……………」

（なあ、提案があるんだが……………）

「ん、なに？」

（今回の手合せ、俺にやらせてくれないか？）

「え、どうやってやるの？」

（お前が俺と意識を交代すれば俺がお前の身体を動かせるようにはなるぞ？…この身体は俺とお前で共有しているようなもんだしな）

「うん、わかったよ。けど、何を使うの？」

（任せておけて、俺にも俺なりの考えがあるし）

俺はそう言って、神様と話しをすることにした。

——うむ。お主の頼みは出来るだけ聞いてやるが…………何が欲しいのじゃ？

（俺に…………との技を使わせてほしいんだ。あとは、練習場所かな？）

——了解した。では、クリスが寝ているときに使えるようにしておくぞ。…………はお主が呼び出せば使えるようにしておく。

（ありがとうございます。）

——よい、儂らにも原因はあるしの。

そして午後――

「では、これから高位魔獣に対する講義を務めさせていただきます。クリスです。みなさんよろしくお願ひします！」

「今回の講義で話するのは、近年増加しつつある《結晶病》についてです。結晶病とは高濃度の七耀石の力場に長時間身を置くと発病します。」

感染が確認されてから数日すると全身に黒と紫の入り混じった結晶が生えはじめ、何もしなければ発病後数か月で衰弱死します。

また、高位魔獣の分泌物にも結晶病を誘発させる物質が含まれており高位魔獣と準備なしに戦闘を行うのは大変危険です。

高位魔獣は七耀石を摂取しないため、通常なら魔獣の死亡と共に土に還るはずの七耀石は地面に散らばり、様々な七耀石が結晶となることであたりに特別な力場が発生します。

このような場所では通常よりも導力魔法の効果が高くなりやすい分、《結晶病》に罹患しやすくなります。

僕が務めていたフェンリルの直属の部隊は対結晶病のワクチンを常備することで隊員が結晶病に罹患するのを防いでいます。

このワクチンを定期的に摂取すれば結晶病をある程度抑えることが出来るんですが、完全に回復することはなくやはり数年後には死亡してしまいます。

レマン自治州から派遣された医療チーム《フライア》ではラケル・クラウディウス博士が中心となって結晶病の治療・治療法を研究しています。」